

## クラシックカメラを寄贈いただきました！

東町1丁目に在住の尾関幸男さんから千代田光学精工（現KONICAMINOLTA）Minolta - 35 Model 1953年頃製造のクラシックカメラとレンズ一式を寄贈いただきました。

寄贈いただいたカメラは文化交流館に収蔵・展示し、町民の皆様にご覧いただきます。



Minolta - 35 Model (1953年頃製造)

## 写真の町“2006”公募撮ライ！ひがしかわ大写真展における写真募集のお知らせ！

写真の町東川町の活力と潤いに満ちた町をテーマにした写真を募集します。

人・動物・家族・風景・花・祭りなど、東川に関する写真なら何でもOKです。

応募いただいた写真は平成19年1月7日（日）から21日（日）まで東川町文化ギャラリーに展示します。

町民の皆様、ふるってご応募ください。

お待ちしております。

募集期間 11月30日（木）まで

応募規定

町民：2 L (127mm x 180mm) から 4 つ切 (254mm x 305mm) までのサイズの写真

町外：4 つ切 (254mm x 305mm) サイズの写真

1人何点でも応募できますが、入賞は1人1点とします。

入賞	
町民一般部門	
・グランプリ	30,000円 1点
・準グランプリ	15,000円 2点
・佳作	5,000円 15点
町外一般部門	
・グランプリ	30,000円 1点
・準グランプリ	15,000円 2点
・佳作	5,000円 10点
町民子ども部門 (中学生まで)	
・グランプリ	5,000円分図書券 1点
・準グランプリ	3,000円分図書券 2点
・佳作	1,000円分図書券 15点



昨年の応募作品より

## スノーボード竹内智香選手表敬訪問

トリノ五輪のスノーボード女子パレル大回転に出場し、9位になった竹内智香（たけうちともか）選手は北海道・株式会社ロイスコンフエクトスキー部/小島アカデミーが9月25日に東川町を訪れ、練習用のサイン入りスノーボードを寄贈いただきました。竹内選手は、父親が旭岳温泉で旅館を経営しており、旭岳スキー場をスノーボードで滑っていることから、オリンピックの記念として東川町にスノーボードを寄贈していただきました。

寄贈いただきましたスノーボードは、役場町民ロビーに9月から設置してあります。特設コーナー内に展示しましたので、ぜひ皆様ご覧ください。



竹内選手サイン入りスノーボード



## 写真甲子園本戦大会参加校から お礼の便りをいただきました！

今年の写真甲子園本戦大会で優勝した沖縄県立真和志高等学校からお礼の便りをいただきましたので、ご紹介いたします。

東川町長様、町民の皆様、大会期間中は大変お世話になりました。

あの奇跡のように晴れ渡った三日間のことが昨日のことのように思い出されます。

私たちの島、沖縄は相変わらず大会期間中のような暑い日が連日続いており、優勝の祝福も様々な方面から次々と聞かれ、興奮いまだ冷めやらぬ状態です。

優勝という大変栄誉ある賞に加え、今年は参観者の皆様による特別賞もいただき感激も2倍でした。

お米もとても喜んでいましたよ。

さて、今年も数々のドラマを生んだ写真甲子園ですが、私たち真和志高校にも優勝の陰にこれまで様々なドラマがありました。

そのことをぜひ、町民の皆様にもお伝えしたくペンを取りました。

私が写真甲子園と関わり始めたのは97年の第4回大会からで、当時は豊見城高校に勤務していて沖縄から初の決勝進出を果たしました。

しかし、初応募で決勝進出できるとは夢にも思わず海外に研修を組んでしまい、急きょ副顧問の勝連竜子先生に監督をお願いすることになったのですが、その監督が現在、私の妻となっております。何とか苦勞をかけながらも以来9年間、毎年応援してくれております。

その甲斐あってか、現在の真和志高校で7回出場させていただきました。

真和志高校では99年の第6回大会からの参加ですが、当時はまだ赴任したばかりでカメラも暗室もなく、部費も年間5千円とわずかなもので、生徒たちのモチベーションもまだ低く、1年生をかき集めてやっとの思いで予選突破したことを思い出します。

その当時の真和志高校は那覇地区ではもっとも人気が高く、毎年定員の半分も埋まらないという、深刻な定員割れを起こしている学校でした。

生徒たちは、根は素直で明るいのですが、劣等感の固まりみたいな存在で、何事に対しても自信が持てないためにせっかくの力を発揮できないでいました。

その生徒たちが、写真甲子園の魅力にすっかりハマリ、以後毎年挑戦するようになります。

自信の無かった生徒たちが徐々に自信を付けていき、周囲の先生方からも「あの子は1年生の頃からは想像もできないくらい変わったね。」「あの子があんなに楽しそうに話しているのを初めて見たよ。」等々。

日常のコミュニケーションさえ苦手にしていた生徒たちがカメラを手にし、写真甲子園を目指すことで豹変してきました。

そして、大学なんて考えられないと言っていた生徒達が3年生にあがる頃には、推薦で大学に合格するほど成長しました。（中学時代不登校でオール1の子がオール5で卒業します。）

そういう生徒たちの成長ぶりで、なかなか変わらない学校もこの様な生徒をもっと生かそうと、3年前にクリエイティブアーツコースというものを立ち上げ、写真映像デザイン、イラスト・まんが表現、陶芸の3つの専攻で教育課程を組むなど学校を挙げて改革に取り組み、今年の入試はなんと15年ぶりに定員を上回るという信じられない成果をあげることができました。

そして、今年のメンバーのように「中学の頃から写真甲子園にあこがれて真和志高校を目指しました。」という生徒も現れるなど、写真甲子園の魅力は着実に生徒達の心を捉えています。

インターメディア部は毎年5月のゴールデンウィークに合宿を行います。

その中で校内ミニ写真甲子園を行い、写真甲子園のメンバー選考を全員で行います。

今年の合宿には30名が参加し、撮影会には浦添工業高校の生徒達も参加したので総勢50人近くが集まり、夕食のカレーが足りなくなるほど盛況でした。

ほんの少し前までは考えられなかったことです。

また、近頃では先輩や部員同士で教えあうことが出来るようになり、私が暗室に入ることもめっきり減りました。

以前のように自分に自信が無く、最初から諦めるような生徒達が、写真甲子園という目標を得てからは、仲間と支え合いながらも着実に成長していきます。

そして、実際に北海道の大地でこの大会を体験した生徒は、三日間で3年分くらいの成長をします。

これまで様々な文化系の大会やコンクールに参加してきましたが、写真甲子園はどの大会よりもハードで辛く、どの大会よりもドラマがあり、どの大会よりも感動があります。

ここに来られた生徒達の感動や、やり終えた後の達成感教育の根幹をなすものだと思います。

このような大会を継続し盛り上げていくのは並大抵の事ではありません。

これも、大会を支えてきた東川町役場のスタッフの努力や地域のみなさまの理解があつての事と思い、感謝の気持ちで一杯です。

今年もたくさんの感動をありがとうございました。

2006年8月15日

沖縄県立真和志高等学校

インターメディア部顧問 新里義和



番左が新里先生